

地域生活と福祉

秋 田 清

On the Welfare in Community Life.

Kiyoshi AKITA

I. はじめに

本年前期の公開講座「地域社会論」は「豊かな生活とは何か」というテーマで、注記のような講師に講義をお願いした。以下は担当者である私の11回目の講義に、多少手を加えたものである。

今回、私は第1回目の講義で、豊かな生活とは何かと問い、それを福祉社会の在り方の問題として考えたいと申しました。すなわち、生活の豊かさというものが、ハンディキャップをもった人たちの豊かな生活の実現と切り放しては存在しないのではないか。少なくともハンディキャップをもっている人の快適な生活を共に実現することとおして、多くのものを得ることができるのではないかと問題提起をいたしました。そして、この問題を、一般的な生活の豊かさと、ハンディキャップをもつ人たちに關する問題について、それぞれ講義をしていただき、考えてきました。

二つの事柄を、一つの連続講義のなかでとりあげたのには理由があります。私は、常日頃、学生諸君に、好き嫌いこそが全ての基準だ、と申しております。日常生活のなかで、行動の基準として、斯くあるべしというようなものはつ

くらない方がよい。一つ一つのことに、どうすべきかをその場その場で考えた方がいい。自分の外に基準を設けて、見栄や世間体で生きるのは馬鹿げているとよく言います。学生たちは、随分いい加減な人だ、と考えるようです。でも、私は、日常生活における行動の基準だけではなく、理論的な諸問題も、論理的に詰めていった最後のところは好みが残るように思いますし、より厳密に言えば、論理そのものが所詮好みの問題だという気もするわけです。

そんなふうに私は生きていますから、ハンディキャップをもっている人との係わりを、必要悪と言うようには考えたくないわけです。自分の好みで、自分の生活を楽しめるもの、豊かなもの、意味あるものにする限りで係わりたいわけです。「豊かさとは何か」というテーマで、「障害者福祉」の問題を大きく取上げたのはそのような理由からです。つまり、私は、ハンディキャップをもつ人の生活を豊かにするための活動が「健常者」の生活を豊かにすることにつながると思うのです。

そこで、かなり乱暴だとは思いますが、今回の講義と来週のシンポジウムを通して、「豊かな生活とは何か」というテーマで提起された、ハレやケ、ケガレの問題と（障害者）福祉の問題を結びつけて考えてみたいと思います。

II. ハレ、ケ、ケガレ

飯沼さん、春田さんには、中世および明治期の庶民生活の豊かさについてお話し下さいとお願いしましたが、そこで、お二人とも「ハレ、ケ、ケガレ」という生活のリズムにふれておられました。とくに、飯沼さんは、宇佐神宮の1年間の諸行事について具体的に述べられ、「ケ」を「気」、「ケガレ」を「気枯れ」として、日常生活に置ける生氣＝ケが枯れる、つまり、気枯れ（ケガレ）たら、気枯れをはらす行事や日を設け、ふたたび生氣を取り戻すものとして、ハレ＝晴があるという解釈を示されました。また、そうした日々の生活が、一定の生産力に基礎づけられていることを考えると、「ケ」は米あるいは一般にものを入れる器である「筥」で、「ケガレ（筥枯れ）」はその器が空になることという解釈も成り立つというお話もなさいました。

人間と自然との共同作業の成果としての環境、人々と環境との係わりのなかで代々伝わってきた生活のリズム、そこに豊かさがあるのかも知れません。さきほどその一部を見ました、「おもいでポロポロ」の世界は正にそれです。それは一定の生産力を前提にした物質的豊かさを基礎にしているということはできますが、物の豊富さがそのまま豊かさの度合いをあらわすわけではなく、それぞれの時代や地域の物質的豊かさ、あるいは貧しさを前提にしたそれぞれの生活の豊かさがあるとも言えます。

そのかぎり、豊かさは物ではなく、人間と自然、人間と人間との関係のなかにあると言えるのかも知れません。その意味で、春田さんがふれられた権力の問題は重要です。といいますのは、権力とは国家の暴力装置のみを指すわけではなく、何よりも、人間と人間との関係（行為）、他人に対する心的態度にその基礎をもつわけですから、人間にとっての豊かさを考えるさいには不可欠の要素です。このように考えると、「豊かさ」は「自由」と置き換えることもできます。

「権力」の問題をここで固有に論じるつもり

はありません。さしあたり、私が問題にしたいのは、そうした生活の環境は、一定の時間的・空間的境界をもっており、内側のリズムは、外部を排除することによって成り立っているのではないかということです。つまり、一定の共同体の内部には、集団の構成員の生活に意味を与え、その集団を共同体たらしめる意味体系、物語があります。それは、その集団の価値意識を形成しております。そのなかで、「気枯れ」は「穢れ」に転化します。

例えば、藤井隆至さんは、柳田国男『石神問答』の松岡輝夫宛の書簡をあげ、次のように述べておられます。

この書簡によれば、路傍に道祖神をまつるのは無知な農民の蒙昧な迷信ではなく、村を不幸から守ろうとする必死の努力のあらわれにほかならなかった。今日の人間にとっての不幸は「病と死」がほとんどであるけれども、かつて人間に不幸をもたらすものには、毒蛇や狼だけでなく、疾病や大雨・早ばつ・大風・害虫などがあり、人はそれらが不可測の「現実」に「畏怖」しつつ生存をはかってこなければならなかった。村人は、それらの不幸は村外の悪神が支配していると解釈したため、その悪神が集落のなかへ侵入してくることをないように村境に神をまつって饗応し、そこを防衛の拠点としたのであった。道祖神などの路傍の小祠がもつ「固有信仰」上の本質は祭祀場という説は『石神問答』の結論であるが、村の出入口に祭祀場を設け、そこに神をまつることで自分たちに襲いかかる不幸を克服しようとした点では、小祠の存在そのものが「偉大なる人間苦」のあらわれを意味していた。「たわいもなき昔の努力も、すべて皆われわれの存在と繁栄とのためなりし」なのである。柳田にとって「固有信仰」は、「人間」が自分たちの「苦」を克服して幸福を得ようとする「偉大」さを根底で支える宗教意識として位置づけられている。その意味で「固有信仰」は、社会と歴史を形成する倫理的な力を有していた。「偉大なる人間苦」と「民間伝承」とは、「固有信仰」を媒介にして結合しあ

う関係にある(② 43~4頁)。

生活のリズムは伝承や信仰を伴い、「社会や歴史を形成する倫理的な力」となります。内部を統合する力は同時に外部を排除する力となります。われわれ個人が都合の悪いことをすぐに他人の所為にしたり、「魔がさした」とするのに似てますが、リズムを乱すものは外から侵入してくるわけです。

松平斉光(あきみつ)さんによると、次のようなものが「穢れ」として排除されるべきものだそうです。

- (1) 衛生的に不潔なものを意味する。糞尿をはじめ、塵芥、腐敗物、溜り水のごとく人間に不潔感を与えるものはことごとくケガレである。
- (2) 必ずしも不潔でなくとも、醜怪な感じを与えるものの全てである。中でも血液は神のもっとも忌むところである。殺傷の出血はもちろん、産血から月水に至るまで、ことごとく汚れとして嫌悪される。
- (3) 死。これは人間の最も嫌うところであるが、神もこれを著しくこれを嫌悪する。禽獣一般の死や死者の屍を切り破ること、鳥獣を殺して料理することも一つの穢れである。
- (4) 自然から受ける損害のすべてであり、人間が虫に刺されたり、蛇に咬まれたり、家畜が野獣に食われ、農作物が害虫にあらされ、天変地異によって人畜の害を受けることなどことごとく罪穢れである。
- (5) 人間の社会生活を攪乱する行為のすべてが穢れである。大祓に列挙されている罪のほか、掠奪、横領、盗族、放火、失火、職務怠慢、などが穢れである。つまり、その時代々々の社会意識が好ましくない行為と感ずるところが穢れとされる(④ 19~20頁)。

こうした内と外の区別と外の排除は、いうまでもなく日本だけの話ではありません。高橋義人さんは次のように述べています。

近代のはらんだ狂気。その淵源と考えられるものはいくつかあるが、それらすべてを通底しているのは、自然の客体化と言う自然の新しい見方である。このあたらしい見方を生

み出したのは、近代科学であると同時に、近代的な都市の成立だった。近代化の歩みは、都市化の歩みと伴行している。近代化とともに、農村文化に代って都市文化が栄えた。都市文化にとって重要なのは、都市を自然から独立したものとして確立すること、つまりできるだけ自然を<外なるもの>として排除することだった。

—— 中略 —— 市壁の外にひろがる自然。それは森と耕作地だった。むろん耕作地は都市に住む住民にとって欠くことができない。そして耕作地をさらに広げるためには、森の木々を伐採し、そこを開墾しなければならない。こうして森は都市文化の住民にとって闘うべき敵となった。

……「魔女」とは都市化された人間からみれば、駆逐すべき自然の擁護者、代弁者だったからである。森のなかに住み、都市文化になじめない人。森のなかで薬草を摘む前近代的薬剤師たち。身体(人間の内なる自然)を相手にする産婆、死や地下世界と親しむシャーマンたち。ジプシー、大道芸人、移動サーカスの芸人など、都市に定住しない漂泊の民。かれらはやはり森とともに「異人」として排除されなければならなかった(⑤ 4~5頁)。

「その時代々々の社会意識が好ましくない行為と感ずるところが穢れとされる」にとどまるならば、それは説明可能で、合理的根拠があるとさえ言えます。しかしそれが「信仰」や「この世とあの世」の区別と結びつく時、人ならぬ人の存在が可能になります。病や死への恐れは言葉で説明することができるような気がしますし、死後の世界を描くのも願望や死への恐れへの軽減としてわかるような気もしますが、「あの世とこの世」の間をさまよう幽霊などがでてくると、言葉での説明がほとんど無意味な気がしてきます。そして、言葉での説明が無意味(あるいは不可能)になったところで様々な感覚、感情や観念は、はじめて真の意味で力をもつような気がします。ちょうど様々な考えや思想が偏見や先入観になってはじめて力をもつようなものです。

生活のリズム（人間と自然との関係，人間と人間との関係）は，変化をうみだす異質なものに対する恐怖心に基礎付けられているので強いとも言えますが，異質なものを排除することによって成り立っている，きわめて危ういものと言うこともできます。

われわれが「障害者」をみるとき，「異質なものの排除」という感覚をもっており，そのことが障害者を差別することにつながるだけではなく，自らをも不自由にしていくような気がするわけです。

例えば，坂巻 熙（ひろむ）さんは次のように述べておられます。

アメリカと一緒に行きました車椅子の青年に，日本に帰ってきて，アメリカといったどこが違うのかと聞きました。そうしましたら，「人々のおれを見る視線が違う」と答えたのです。どう違うか。「アメリカに行っている時は，顔に視線を感じた。日本に帰ってきたら背中に感じた」というんですね。

たしかにわれわれの一行は珍しかったと思います。日本人で，車椅子あり，松葉杖あり，そしてまあわれわれみたいな人間までついておりましたから，道を行くとみんなが聞いてくる。「お前，何しに来たんだ」「これからどこへ行くんだ」と。

そこで旅行の趣旨を説明すると，「わかった。頑張れよ。これから大変だからな」と，握手して励ましてくれる。たいへん歓迎されるわけですね。当たり前仲間として，顔と顔と見合せて会話ができる。

ところが日本に帰ってきてみると，すれちがう人はみんな目をそらす，そう彼は言うのです。まともに見てくれない。声もかけてくれない。そして，すれちがったあとと振り返ってオレを見る。その視線を背中に感じる，と言うのです（⑥ 84頁）。

「振り返ってみる」といわれると何か言い訳をしたくなったりもしますし，「視線を背中に感じる」と言われると，それはハンディキャップをもった人にかぎらず，われわれも，しばしば感じるのだと言わざるを得ません。そのかぎ

りハンディキャップをもっている人々を捉らえている問題，あるいはハンディキャップをもっている人々を，「ハンディキャップ者」や「障害者」にしている問題は，同時に「健常者」を捉らえている問題でもあると言えます。それは「世間」というものなのかも知れません。

テレビの番組でのことでしたので発言者の名前は忘れましたが，また，森公敏さんも講義のなかでおっしゃっていましたが，「背中に視線を感じる」だけではなく，子供をつれた母親の「良い子にしないで，あんなになりますよ」という声が聞こえてくるのだそうです。その母親はその母親で一つの世界をもっており，豊かな生活，良い人生，正しい生き方があり，そこから外れたらいけないと教えるわけです。

そこから外れたもの，違ったものを排除し，卑しめ，自分とは関係のないものと言い張ることによって，自分の生活や集団を維持しようとする。そのかぎり，精神的には皆障害者なのです。

Ⅲ．共生の思想

知的ハンディキャップをもった人たちとのコミュニケーションの在り方を，実践的に探っておられる寄村さんは，「その人の居る事を排除しない生き方」，「違いを認め合ってもに生きる」，「本人が望まない限り排除しない」人間関係や集団の在り方について語られました。「好き嫌いこそがすべて」で生きている私としてはなかなかそうはいきませんが，そのとおりにできたらどんなに良いだろうと思います。

そして，ネバーランドの村上さんのような活動を知ると，当事者だから当然だとも言えますが，ハンディキャップをもった人たちのなかでは既に準備ができていくという思いを強くします。村上さんは障害者たちの自立の運動を商店経営を中心になさっておられるのですが，その際，「障害者がつくったものを売らない」，「＜障害者＞を売り物にしない」ことを原則にしているということでした。障害者が経営している店を訪ねると，全国どこにいっても場所を見つけ

るのに苦労しない。それは「障害者の店」と大きく書かれているからだ。それを見ると、障害者の店だから多少高くとも、障害者が作ったものだから多少悪くとも、障害者のためだから要らないものでも、と言っているようで、それは変だとおっしゃるわけです。そして、障害者の店だからという理由で自分たちの店で買ってもらわなくてもよい、自分たちは、他の店と対等に、安全で、良い品物を、安くという点で、競争していきたい。ただし、障害者の自立のための低利の融資は受ける、ということでした。今回は制度の問題に直接ふれることはしませんが、こうした人々の活動を支えるものとして社会の諸制度は必要だと思っただけです。

また、最近、「障害」(=差し障りがある、害がある)という言葉の代りに、「ハンディキャップ」という言葉を使う人が増えています。それはこのような意味で、大事なことだと思います。

もっとも、「障害者」の代りに「ハンディキャップ者」と言ったのではたいして変わりがないような気もいたします。つまり、片手のない人、足が自由にならない人、目の見えない人、こうした人たちを、「障害者」、「ハンディキャップ者」とレッテルを張って区別し(差別し)、何か特別の人として扱うのではなく、背の低い人が高いところのものを取る時に、脚立をつかうように、ハンディキャップをもっている人にたいして、そばにいる人、あるいは社会がそのハンディキャップを補っていくということです。

松兼功さんは、ご自分のことについて「障害者の松兼功さん」とか「障害者のフリーライター」と紹介されることにたいして、「障害者」は「私のすべてではない」、「ただの人間としてふるまえる空間や時間が不可欠」であると言われ、ある人がスウェーデンで、「“障害者の画家”に逢いたい」と依頼した時の話を紹介しておられます。現地の福祉関係者は「障害者の画家」の意味がなかなか理解できずやっと意味が理解できたその関係者は「スウェーデンには、画家のなかに障害をもった人はいますが、“障害者の画家”はいません」と答えたそうです。

松葉杖の男性は、酒好きのおっさんだったり、車椅子の女性は刺しゅうの上手なおばさんだったりするわけで、かれらを、まず「障害者」として見るのではなく、酒好きのおっさんや刺しゅうの上手なおばさんが、たまたま背が低かったり、足が悪かったりもする、と見ることができるようになるのには、たぶん何かが必要なのだとは思っています。それが何かがよくわかりませんが、人を見る目をちょっと変えること、世の中をちょっと違った角度から見ることで、それだけでまったく違った世界が開かれるようにも思っています。

しばらく前に「価値観の多様化」という言葉が流行りました。多様化したものをなおかつ「価値観」と呼べるのかどうか問題ですが、一人一人がそれぞれ自分の価値観、自分の世界をもつようになったということなら、集団の求心力の弱化であると同時に異質なものを排除する力も弱くなったわけで、歓迎すべきことなのかも知れません。

そうであるとすれば、社会規範の崩壊を嘆いたり、みだりに新しい規範の創造を叫ぶべきではないのかも知れません。しかし、私としては次のようなことは、さしあたり考えておきたいと思っただけです。

糸賀一雄さんは次のように述べておられます。

精神薄弱者たちの中には、今日の進歩した文明社会の機構にはなじめないものもたくさんいる。いつもはみ出され、失敗をくりかえし、悄然としてかえり来るものもある。しかし、この子たちが愛情と理解あふれた社会の中で、生活と生産を通じて示す素朴なそして純粋な人間性は、汚濁にまみれた文明社会の非人間的な世界にもたらず一陣の清風であるかもしれない。

私たちは今ここで、文明社会における進化が人間の幸福にとって何であるかということをお問おうというのではない。精神薄弱が、文明社会の機構になじまないからといって、文明の世界に背を向けるのでもない。一般論的にいえば、そのなかにありながら、精神薄弱

というハンディキャップをもったその人格の全存在をとおして、この世の中に、逆に、はたらきかけていこうという主体性を育てることである。それはかれらのめぐまれない現状にたいして、世の光をあてるということであるよりも、そのような愛情と理解を、社会のなかに育てながら、さらに一人一人の精神薄弱児たちを、世の光にまで育てあげることである。精神薄弱児たちのこのような主体性は、生活を共にする教育的、人格的な交流のなかで形成されることを、もう一度考えてみたいものである(⑦ 52～53頁)。

あるいは、正村公宏さんは「ダウン症の子をもって」のなかで、次のように述べておられます。

あえて言葉にあらわせば、彼のおかげで、人間について、そして社会についてこんなにもたくさんのことを考えさせられた、という気持ち、それが、私と彼とを結びつけ、母親と彼とを結びつけ、そして私と、家内すなわち彼の母親とを結びつけている、ということになるだろうか。いうなれば、彼はそのことによって、そしてただそのことによってのみ、私たち家族、なかんずく彼を育てる苦しみのほとんどの部分を一身に背負ってきた彼の母親に報いているのである(⑧ 241頁)。

糸賀さんは「かれらに世の光を」ではなく、「かれらを世の光に」という視座を提示され、「かれらの光」を、「素朴なそして純粋な人間性」だと言われます。もとより、社会と切り放されたところで培われた純粋さは、一般社会の光があたった途端に萎れるようなものかもしれません。そのかぎり、一般社会の醜さを写す出す鏡になれるというにすぎないかもしれません。しかし、「かれらの主体性」、社会に係わる姿勢と社会のかれらにたいする「愛情と理解」を育み広げることができたら、今とは異なった、人と人との結びつき(価値)、社会の在り方を作り出すことができるかも知れません。

正村さんは「彼のおかげで、人間について、そして社会についてこんなにもたくさんのことを考えさせられた、という気持ち」が家族を結

びつけている、とのべておられます。

また、森さんは、「共振」という言葉を使われ、「健常者」の間での「共振」と「健常者」とハンディキャップをもっている人との共振との違いについての質問に、次のように答えていらっしゃいました。

ハンディキャップをもっている人はそうでない人と違った経験をもっており、もったがゆえに新しい経験がある。私等はこういう目の高さでみているが、車椅子だともっと低い目の高さになってくる。そこからみると世の中は、また違ってみえてくる。その違ってみえた話が私たちに伝わってくるとそれが異なった感動を作り出す。また、傷ついたがゆえにやさしさや強さや悲しみが強いということがある。そのことが私たちに伝えられると、それが私たちに共振をうみだすエネルギーになるということも事実である。人間がもっている本質的な弱さに接した時に、人間は感動するのじゃないか。ただ弱いからといって寝てたら、肩を抱合せて泣いていたら、それは感動も何も生まない。弱さを克服しようとするところに共振や、感動が伝わってくるのだと思う。

山田太一さんは「断念するということ」のなかで次のように述べておられました。

「生きるかなしみ」とは特別のことをいうのではない。人がいきていること、それだけでどんな生にもかなしみがつきまとう。「悲しみ」「哀しみ」時によって色合いの差はあるけど、生きていることは、かなしい。いじらしく哀しい時もいたましく悲しい時も、主調底音は「無力」である。ほんとうに人間に出来ることなどたかが知れている。偶然ひとつで何事もなかったり、不幸のどん底に落ちたりしてしまう。一寸先は闇である。

—— 中略 —— 大切なのは可能性につきつきと挑戦することではなく、心の持ちようなのではあるまいか？ 可能性があってもあるところで断念して心の平安を手にするものではないだろうか？

かつて、花崎皋平さんは「無に等しいもので

ありながら、自分と同じ運命のもとに他人もまたおかれていることを、身につまされて感ずることができたら、そこに生まれる感情は、〈やさしき〉と名づけられるだろう」(⑩ 12頁)。このような感情を触媒にしてはじめて、人々の連帯が可能になるのではないかと述べておられました。

IV. ボランティア社会

金子郁容さんは『ボランティア —— もうひとつの情報社会』という興味深いタイトルの著書のなかで、

ネットワークとは……

動的情報を発生させるプロセス
相互作用の中での意味形成のプロセス
自発性を基礎にする関係形成のプロセス
関係変化のプロセス (⑪ 123頁)。

と述べておられます。

また言葉遊びですが、森さんがおっしゃっていた「共振」は、「響振」の方が内容に近いかも知れません。砂粒を鉄板の上のせて、バイオリンの弓で鉄板を振動させると、砂粒は板の上で様々な幾何学模様を描きます。弓と鉄板と砂粒とは共に振るえてはいるが、それはそれぞれ固有の振るえ方をもっている。それは正に響きあいである。鉄板が平たいからといって、砂粒も一様に平たくなるわけではない。それは固有の形、固有の響きをもっている。

われわれは個人を個人として容認すること、考え方の相違や利害の対立を前提として折り合いを付ける道を学ばなければならないような気がします。それは、「本人が望まないかぎり排除しない」関係であると同時に、本人が望まない限り仲間に入れない関係でもなければならないような気も思います。仲間に入ること自体のなかに一定の条件が在ることは、諸個人間の利害の相違や対立が存在するかぎり、あるいは有機体としては別組織であるかぎり、不可避的なことであって、これを排除することは、万人が神であることを求めることになるような気がします。それは本来不可能なことです。理想として

掲げる理念を人間が描けるということと、それをただちに現実化できるかどうかとは自ずと別の問題なのだろうと思うわけです。ましてその理念が「多様化」していれば、不可能なことです。「受入れる」といっても、様々な受入れ方があるように思うわけです。

言葉遊びの感がありますが、正村さんが具体的な生活の場の問題において強調しておられる「個別性」は、何か一般化して学び得るものを含んでいるように思います。

正村さんは次のように述べておられます。

私がここで強調したいのは、障害者問題の個別性ということである。障害者自身にとっても、障害者を家族にもっている人間にとっても、一般的な障害者問題などというものは存在してない。かれらにとっては、毎日毎日、それとの格闘を続けなければならない生活上の問題があるだけである。そして、その生活上の問題なるものが、きわめて多様であり、個別的である。なぜなら、障害者を障害者と呼ばしめている原因あるいは理由が、きわめて多様であり、個別的であるからである。障害者と一言でいうが、障害の内容、程度は、千差万別なのである (⑧ 239頁)。

個別性の重視と、同じことですが、多様化したものを「価値」や「規範」と言い張ることをやめ、それを「好み」だと考えれば、内部にたいする画一的規範の強制と異質なものの排除から、われわれは自由になれるような気がするわけです。集団をなして生活をする時、「好み」の絶対性など主張するわけにはいかず、われわれは「分をわきまえ」て生活せざるをえないわけですが、その「分」というのは封建社会における「身分」ではないわけですから、われわれは所詮自分を中心に、自分の好みで生きているのだから、そのかぎり己れの生活の個別性、部分性、相対性をわきまえていなければならない、ということのように思えます。そのような意味で分をわきまえることが、他人や自然に対して優しくなることにつながるような気がします。そうして、その時その時、必要なかぎりですべてを組織する道をわれわれは学ばなければな

らないのではないのでしょうか。そうした人と人との結びつきを私は地域と呼びたいと思います。

(註)

平成7年度前期公開講座「地域社会論」一覧

- 秋田 清 (別府大学短大部)；豊かな生活とは何か
飯沼 賢司 (別府大学文学部)；中世の四季
森田 均 (別府大学短大部)；情報社会の意味
春田 国男 (別府大学短大部)；文明開花・庶民の娯楽あれこれ
金子進之介(別府大学短大部)；精神の貧しさとしてのいじめ
雨宮 洋子 (泰生園施設長) ；安心して暮らせる町づくり・文化づくり
森 公敏 (別府リハビリセンター-厚生部長)；自立への支援
寄村 仁子(あゆみの会代表)；支えあって共に生きる
片岡 正喜(大分大学工学部)；ハンディキャップ者配慮の町づくり
村上 和子(ネバーランド代表)；共生へのアプローチ～知的障害者の地域参加～
秋田 清 (別府大学短大部)；福祉とは何か
パネルディスカッション；豊かさとは何か

参考文献

- ① 松兼 功『障害者に迷惑な社会』晶文社 1994年。
- ② 藤井隆至「地域主義の倫理的基礎 —— 柳田国男『遠野物語』の経済思想史的意義 —— 」秋元英一、廣田功、藤井隆至編著『地域と市場』日本経済評論社 1993年。
- ③ 波平恵美子『ケガレ』東京堂出版 1985年。
- ④ 松平齊光『祭 —— 本質と諸相』朝日新聞社 1946年。
- ⑤ 高橋義人『魔女とヨーロッパ』岩波書店 1995年。
- ⑥ 坂巻 熙『生きること 生かされること —— 共につくる福祉社会へ——』ぶどう社 1990年。
- ⑦ 糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス、1968年。
- ⑧ 正村公宏「ダウン症の子をもって」『世界』1981年9月。
- ⑨ 山田太一「断念するということ」〔同編『生きるかなしみ』筑摩書房 1991年〕
- ⑩ 花崎皋平『生きる場の哲学』岩波新書 1981年。
- ⑪ 金子郁容『ボランティア —— もうひとつの情報社会』岩波新書 1992年。
- ⑫ 阿部謹也『「世間」とは何か』講談社現代新書 1995年。